

☆ 平成25年度 総合授業力リーダー「名場面集」 ☆

A light green silhouette map of the Shikoku region in Japan, serving as a background for the title text.

「さぬきの授業 基礎・基本」

～ 子どもに学びのときめきを ～

実践事例集別冊

平成26年3月
香川県教育委員会

目次

I	はじめに	3
II	名場面集	4
○	さぬきの授業 基礎・基本 I-1 「豊かな表情は学習意欲を引き出します」とは?	4
○	さぬきの授業 基礎・基本 I-2 「精選し、計画的、意図的に発問・助言する」とは?	4～
○	さぬきの授業 基礎・基本 I-4 「発言を取り上げ、学級みんなのものにする」とは?	7～
○	さぬきの授業 基礎・基本 I-5 「つまずきと変容を継続的に見つめ、安心感がもてるようにする机間指導」とは?	9～
○	さぬきの授業 基礎・基本 I-6 「学習過程や結果が分かる板書」とは?	10～
○	さぬきの授業 基礎・基本 I-7 「学びを振り返るノート指導」とは?	12
○	さぬきの授業 基礎・基本 I-8 「グループ学習によって効果が上がる」とは?	13～
III	おわりに	18

I はじめに

本冊子は、「さぬきの授業基礎・基本 ～子どもに学びのときめきを～」(平成25年3月 香川県教育委員会発行)に書かれている基礎的・基本的な指導技術を総合授業力リーダーの先生方が、小・中学校の現場で具現化した実践を「名場面集」として紹介する事例集です。

総合授業力リーダーとは、県教育委員会が委嘱している教科等の授業力の高い先生方のことです。平成25年度は、下記の案内を配布し、特定の教科等(小学校:国語、社会、算数、理科、生活、図画工作、家庭、体育、道徳、外国語活動 中学校:国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、技術・家庭、外国語、道徳)計30名の総合授業力リーダーが、県内教員の授業力向上に資するため、授業を公開しました。本年度は、のべ936名が参観し、大変好評でした。

本冊子で紹介している事例をご覧いただくことで、その基となる考え方を「さぬきの授業 基礎・基本」に求めたり、「さぬきの授業 基礎・基本」から「これは具体的にはどういうことなのだろう」と問いをもって本冊子を開いたり、日々の授業改善に役立てていただけることを願っています。

授業力の向上を目指す教師のために・・・

観て気付く、観てまねる、観て創る

総合授業力リーダーの授業を参観しませんか？

教師の最も重要な仕事は、「授業」です。

授業力を高めるには、優れた授業を数多く観て具体的なイメージを得ることが大切です。

そこで、県教育委員会では、授業力の優れた先生方に〔総合授業力リーダー〕を委嘱し、公開授業&討議をお願いしています。

「いつか、こんな授業をしてみたい!」「こんな子どもたちを育てたい!」という先生方の夢や希望を叶えるヒントが、総合授業力リーダーの公開授業には満ち溢れています。

子どもたちが学びのときめきに胸躍らせる、そんな授業を創るための一歩を、総合授業力リーダーと一緒に踏み出してみませんか。

※ 参観を希望する場合、授業1週間前までに当該校へ電話で申込
てください。

※ 「さぬきの授業 基礎・基本」をご持参ください。



Ⅱ 名場面集

総合授業リーダー公開授業「名場面集」

総合授業リーダーの先生方に、「さぬきの授業基礎・基本 ～子どもに学びのときめきを～」に書かれている指導技術を、実際の授業の場で具体的に示していただきました。その名場面集を紹介します。

さぬきの授業 基礎・基本 I-1

「豊かな表情は学習意欲を引き出します」とは？

視点1「表情・話し方」の実践提案は直島小 濱中紀子先生と長尾中 川畑啓子先生。参観された先生方から、「表情だけでなく、身体全体で表現されていた」「簡潔で的確な指示、間の取り方、一人一人を認める表情が子どもを惹き付けていた」などの感想が寄せられました。



さぬきの授業 基礎・基本 I-2

「精選し、計画的、意図的に発問・助言する」とは？

視点2「発問・助言」の実践提案は四箇小 篠原正義先生。無駄な言葉を省き、非常に聞き取りやすいスピードの発問を軸に、安心感の中でしっかりと授業が進みます。授業記録がとれるスピードならば、子どもたちにも伝わります（1分間に300字）。具体と抽象を行き来させる助言も光りました。

「例えば、どういうことなの？」

「つまり、一言でまとめると？」

また、実物資料を非常に有効に活用していました。家で集めたペットボトル、リサイクルコーナーの大きなゴミ袋、トイレトーパー等々。子どもはその度に「ええ！！」と抜群の反応を示します。篠原先生は、このような素直な表現を非常に大切にしていました。



「地域貢献」という難しい概念を追究する授業でしたが、「なぜ、店がペットボトルを回収しているのか」という文脈の中で、具体（実物）、半具体（画像）、半抽象（構造図）、抽象（言葉）と資料を構成し、子どもたちの理解を深めていました。

宇多津中 島根ゆかり先生の実践です。

C「先生、『人間らしく死ぬ』の意味が分かりません。」

T「では、『人間らしく生きる』とはどういうことか、分かりますか？」

これは、端的で素晴らしい切り返しでした。
「死」を考えることは、「生きる」ことと向き合うことだからです。

「命」という重いテーマ、しかも厳格な学習ルールはありながら、堅苦しくない。3つの「わ」がある授業でした。

- ① 知的好奇心を誘発するモラルジレンマの資料で「わくわく」の「わ」。
- ② 葛藤場面の判断・意志決定を通して納得の「わかる」の「わ」。
- ③ 友だちの新しい考えに触れて「わらいと拍手」の「わ」。



決して茶化さず、真剣に命について考え、自分ごととして話し合う生徒たち。クラスのほぼ全員が「道徳が好き」と答える理由が分かったような気がしました。深い教材研究、子どもの反応こそを教材化する助言、無駄なく、スキのない板書や掲示等の環境設定。教師自身が自分に厳しく、学び続けているからこそ子どもが育つのだ、というよい手本を見せていただきました。 参観者も非常に熱心で、討議終了後も島根先生と教材を囲んで、熱心な議論が続きました。

琴平中 片木賢治先生の実践です。

「3×3の信号（マス目）では、NとHが同じに表現されてしまいます（写真上）。どうすれば、NとHの区別ができるようになるでしょう？」

というデジタルの本質をつく発問が光りました。

にここにしながら全員の挙手を待ちます。

「4×4、いや、5×5の信号にしてみたら…」と正答が出た後も、やはり待ちます。つまずきを想定した上で、生徒に自分のことばで表現することを求め続けました。



まず深く広く教材を集めた上で、子どもの側に立ち、思い切った教材の精選を行い、さらに子どもを信じる姿勢が優れた発問を支えていることを学びました。

「教えねばならぬこと」を教材研究によって教師の「教えたいこと」に変換し、さらに子どもの側から教材を見つめ直し、子どもの「学びたいこと」に変換する。授業づくりの本質が、そこにはありました。

亀阜小 岡本都久美先生の実践です。

町探検で地域の方とふれ合った時の様子を、ペープサートでグループごとに表現しました。他グループの発表を聞いて、どんどん質問をするという姿が印象的でした。しかし、岡本先生は「進んで質問ができる」というだけでは、満足しません。発表した子どもたちに「自分たちの発表を聞いて、どう思ったのかを尋ねてみるといいよ」と助言しました。



聞き手の子どもたちは「わたしも〇〇さん（地域の方）が言ったように、火遊びをしないようにしたいです」等と、発表を聞いて気付いたことを基に、自分はどうしたいのかを考えるよい機会となりました。

生活科のねらいの一つに「対象に対する自分の身体の振る舞いの高まり」がありますが、先生の助言がまさに、このねらいに向かうものでした。

浅野小 葛西秀樹先生の実践です。

T「同じ日本橋の様子を表す2枚の絵。江戸の様子が明治の様子に変化するのに、何年くらいかかったと思う？」

C「5年?」「10年?」

12歳の子どもたちにとって、5年や10年はとても長く感じます。しかし、それでは、幕末から明治へと大きく変化した10年を「急激な変化」と捉えるのは難しいことです。そこで、葛西先生は、比較対象として平安から鎌倉への変化が約200年かかった資料を提示します。



T「もう一度聞くよ。何年くらいかかったと思う？」

C「50年!」「100年!」

T「実はね。10年間でこれだけ変わったんだ。」

C「ええー!!!」

子どもたちは、確かに「急激さ」を実感していました。参観者からは、「導入で本時のゴールを示され、子どもが主体的になっていた。」等の声が聞かれ、大絶賛でした。



坂出東部小 川井一代先生の実践です。

「無駄な言葉がなく、教師の言葉が減ると、その分子どもの言葉が増えていた」
「子どもの意見をすぐに教師が評価するのではなく、子ども同士の相互評価を促す助言が素晴らしかった」
などの感想が参観者から寄せられました。



大野小 川田容子先生の実践です。

「これは、先生が書いたお話です。」

(モデル文を提示。子どもは張り切って音読)

「いいところを見つけてください。」

(次々と発表)

「でもねえ、直したいところもあるんだけど。」

(子どもたちは、先生の文章にも直すところがあるのか、とびっくり！生き生きと探し始める)

このように、子どもたちが興味を持って取り組めるよう短く分かりやすい発問・助言でした。しかも、子どもたちの顔を見ながら、間や声の大小、抑揚を意識して、子どもたちを惹きつけていました。



また、透明シートと消しゴム付きサインペンを活用して、子ども同士で推敲できるように工夫していました。教具が子どもにとって魅力的であり、しかもシートを活用する手順が視覚的にも示されていたので、どの子も進んで活動することができていました。さらに、継続的にこのシートを活用することで、子どもたちが推敲する力を着実に身に付けていることがうかがえました。

さぬきの授業 基礎・基本 I-4

「発言を取り上げ、学級みんなのものにする」とは？

視点4「発言の取り上げ方」の実践提案は太田中 茂中則子先生。

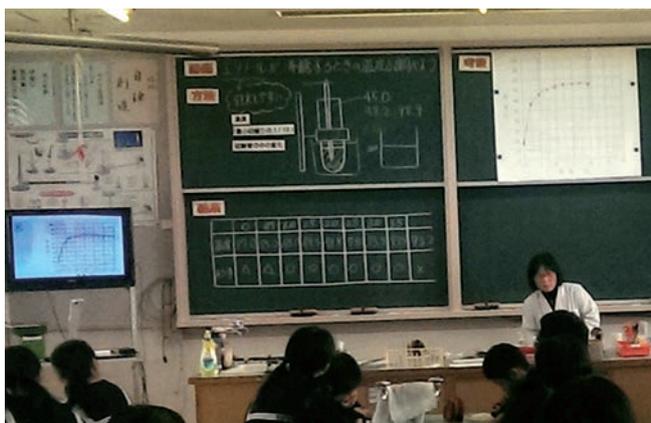
あえて、グループごとにエタノールの量を変え、各グループの実験結果(グラフ)をOHPシートにかかせ、重ねて提示することで、結果を比較しやすくしていました。

このことにより、結果の相違点と共通点が明確になり、子どもの考察の助けとなりました。



エタノールの沸点を調べる実験では、日頃から学び方をきちんと指導していることがよく分かりました。細かな指示を与えなくても、各グループの子どもたち自身がてきぱきと役割分担を決め、主体的に活動していました。

予め板書した実験道具の図に、やりとりしながら実験方法を書き加え、子どもに活動の見通しをもたせる等、確かな指導技術が光りました。



坂出小 伊賀由美子先生の実践です。

「場面ごとの詳細な読み」ではなく、単元を貫く言語活動を展開することは、国語科の大きな課題です。**伊賀先生**は、ファンタジー作品の特徴を生かしてお話のおもしろいところを見つけしていました。

反応の組織化の基本は、今、何を話し合っているのか、その意味を全体で共有することです。そのために、伊賀先生は、動作化を取り入れたり、児童の選んだ「おもしろい場面」を拡大した教科書教材にシールで示したりする等の工夫がありました。また、書く場面では、丁寧な個別指導を行い、その子どもの状況に合った助言を行っていました。

子どもの発言に対して「教科書のどこに書かれているか」「大事な言葉を見つけて」等と根拠となる言葉を示すよう促して、言葉を大切にされた指導を積み重ねていることがよく分かりました。



屋島小 山地八重先生の実践です。

山地先生は、問題場面の提示の仕方や数図ブロックを操作できるワークシートで子どもの発言意欲を高めました。そして、つぶやきを上手く拾いながら、子どもの意見をつなぎます。

「どちらが分かりやすかった？」

「教えやすいものは？」

など、簡潔に聞き返し、子どもの反応を教材化するよう努めていました。

参観者からは、

「聞く・話すの学習規律がきちんと定着していた。指示しなくても答えではなく、数え方を発表している姿に、学び方の育ちを感じた。」と大絶賛でした。



一宮中 齋藤紀子先生の実践です。

齋藤先生の授業では、教師自らが授業を楽しむ姿勢が、子どもに伝わっていました。文学的文章の題材では、登場人物の行動にいかに着目させるかが指導のポイントとなります。それを丁寧に指導するとともに、

「どうして作者は絵本を書くようになったのか」

という単元を貫く課題意識が非常に効果的に働いていました。また、子どもに安直な答えを許さず、よく考えさせ発言させていたのが印象的でした。



授業討議では、学習規律や教材研究の仕方から授業が成立するまでについて、丁寧に語っていただきました。どんな質問にも的確に答えてもらったので、参観者にとって、非常に満足度が高い討議会になったようです。

直島小 濱中紀子先生の実践です。

「周りが理解できるまで一人の子どもの意見をしっかり聞く場を大切にしていた。」
「子どもの説明をつなぎながら授業を展開していた。」
「心がゆさぶられた経験を問うなど、歌わない子どもへの支援が素晴らしかった。」
などの感想が寄せられました。



さぬきの授業 基礎・基本 I-5

「つまずきと変容を継続的に見つめ、
安心感がもてるようにする机間指導」とは？

視点5「机間指導」を実践提案は協和中 岡昌代先生。

中学生の発達段階で、心の内面をみんなの前で表出するのはハードルの高い活動です。

岡先生は、

- ① 困ったらいつでも振り返ることができる美術ノートの積み重ね



- ② これまでの子どもの変容を綴った記録

などを活用して、机間指導を行い、子どもが表現しやすい環境や活動を工夫していました。

屋島中 西山千佳先生の実践です。

通常、机間指導では、つまずく子どもに支援しますが、**西山先生**の机間指導は、ひと味ちがいます。

あえて、周りの子どもに対して、補助の仕方を丁寧に指導します。また、学び合いが始まるまで温かく見届けます。

そうすることによって、先生がいないグループも互いにアドバイスを送り合ったり、補助し合ったりと学び合いが成立していました。



子ども自身が残像を残す足跡マークや技のコツを示したワークシートなどの支援環境を整えているのも効果的でした。

討議後、ぽつりとつぶやかれた「技ができた時より、できん時の子どもの気持ちの方がよう分かるんや」の一言が印象的でした。



飯山中 西原弘子先生の実践です。

西原先生は、常に明るく一人一人の顔をよく見つめ、意見の取り上げ方も実に公平です。数学的な表現を過度に求めず、子どもの素直なつづやきを拾ったり全体に広げたりしていました。

分からないことを分からないと言える学級の雰囲気がとても素敵で、日々の実践の積み重ねを感じました。



分からないことを恥ずかしく言えずに言える、その秘密は、机間指導にありました。

指導内容はプライドを傷つけないよう小声で、よさは大きく取り上げ、周りへのヒントにしていました。また、全体発表を控えた子どもには、内容を確認して自信をもたせていました。

子どもへのきめ細やかな配慮が光りました。



さぬきの授業 基礎・基本 I-6

「学習過程や結果が分かる板書」とは？

視点6「板書」の実践提案は玉藻中 桑島哲治先生。

カカオの実物やチョコレートのクイズなどで、子どもの関心を高めたり、動画や画像資料でイメージをもたせたりと、とても丁寧に事実認識を積み上げていました。

また、子どもの手元にあるワークシートと板書が対応しており、子どもといっしょに白地図の色ぬりや板書を進めていたので、子どもに、今、何をすればよいのかが、よく伝わっていました。

そうした安心感の中で、地理の基礎・基本をおさえられていました。色鉛筆を用意し色を塗ったり、線を引いたりといった作業的・体験的活動の大切さを改めて感じました。

「常日頃から資料を収集・整理している姿勢を見習いたい。」

と、協議会が終わった後も、桑島先生を囲み、質問が尽きませんでした。



柞田小 石川倫章先生の実践です。

補助黒板や掲示の中にキーワードが示されており、その掲示物进行操作しながら発表するように子どもたちに促すなど、これまで学習してきたことを活用して学習を進めていました。

上弦の月と下弦の月の比較を促すために、配置を工夫したり、予想、観察・実験、結果の過程がよく分かるように配置を工夫したりと、大変すっきりとした見やすい板書でした。

月の形が日によってどのように変わっていくのかを体感できるよう、モデル実験をしたり、ワークシート上に書き表してそれを交流したり、子どもの意識の流れを大切に学習過程が工夫されていました。

そのため、子どもの学習に対する意欲が非常に高く全員がよく手を挙げ、意見を交流し合うすばらしい授業でした。

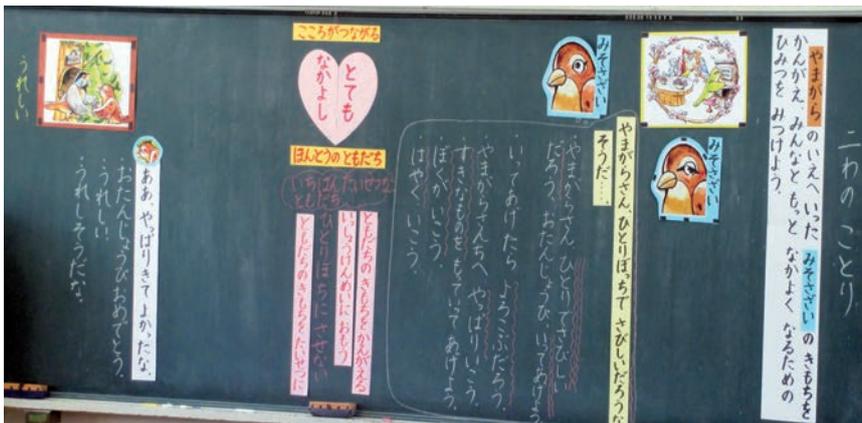


長尾小 松岡清美先生の実践です。

子どもたちを教室の前方に集め、落ち着いた雰囲気の中で、**松岡先生**の語りが始まりました。必要に応じて挿絵を黒板に貼り付けたり、ペープサートで動きを入れたりしていました。静かに聞き入る子どもたちの姿が印象的でした。

板書の挿絵は、資料にない表情のものを用意したり、裏面にひっくり返して貼れるようにしたり、色を決め、登場人物の動きを捉えやすくするなど、随所に工夫が見られました。

みそさざいの心情を吹き出しに書かせる活動では、「今日は、ここの部分をもう少し書いてね」等の声かけが見られ、後の発表の指名に生かしていました。「だから」「そうすれば」「だって」「しかも」などの言葉を子どもに示すことで、必要な部分を書けるようにしていました。「『やまがらの家に行こう』と言っているけれど、暗くて遠いところにあるのに、なぜそう思うのか」と切り返す等、発問も光っていました。

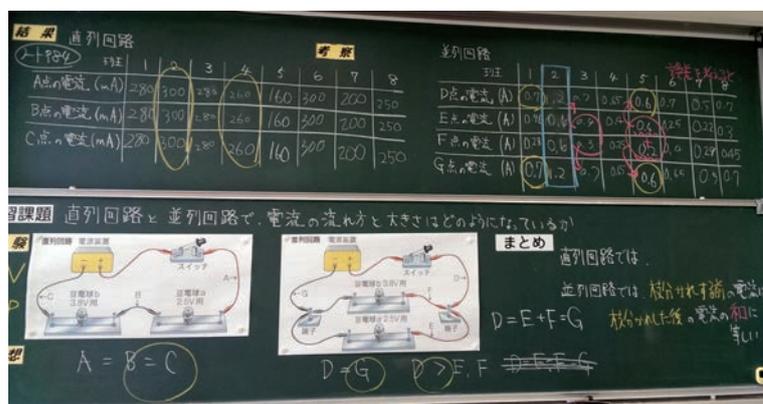


高瀬中 福田宏志先生の実践です。

非常に構造化された板書でした。実験結果（画像上部）と分けて、予想とまとめ（画像下部）を横並びに書くことによって、子どもは自分の考えの変容を自覚することができました。

また、終始笑顔で授業が進められているのも印象的でした。子どもの小さな気付きや表情にも賞賛の言葉をかけていました。

さらに、実験の苦手な子ども同士、得意な子ども同士でグループを組ませることによって、全員に活躍の場ができていました。結果を得るために、誰もが実験に関わらざるを得ない状況をつくり出していくことは、非常に効果的なしかけであると再認識しました。



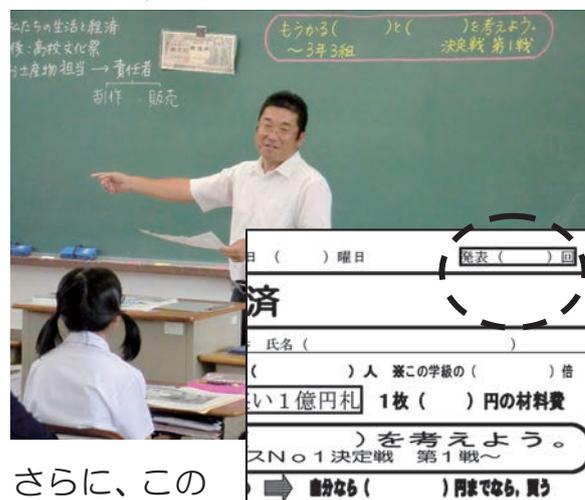
さぬきの授業 基礎・基本 I-7

「学びを振り返るノート指導」とは？

視点7「ノート指導」の実践提案は観音寺中 片山一良先生。

需要と供給の関係を理解させることはなかなか難しいものです。片山先生は、架空の品について原価を設定し、もうかる価格と準備数を考えるシミュレーションを通して、その理解を図りました。子どもは、売る側・買う側に立場を転換しながら、グラフを完成させていました。

また、毎時間ノートとして使用するワークシートは3年間分のシートが既に準備されており、子どもも安心して授業に取り組んでいるようでした。



さらに、このシートは、事後の評価や子どもの復習にも利用できる優れたものでした。

例えば、発表回数の記入は右上にして、一枚ずつ少しずつで、個々の発表回数が一目で分かるようになっていきます。板書もワークシートも先生の丁寧できめ細やかな配慮が行き届いていて、子どもを大切に思う気持ちを感じました。



さぬきの授業 基礎・基本 I-8

「グループ学習によって効果が上がる」とは？

視点8「グループ学習」の実践提案は高松第一中 山本恭子先生です。

8月に来日したばかりのALTに、日本が誇る伝統文化を紹介するグループ活動をされた山本先生。子どもと山本先生、ALTとのやり取りもほとんど英語。また、他のグループからのリクエストに応じて、その場、その時の即興で剣道や習字の実演に英語での解説を加える等、みんなで作りあげる本物のコミュニケーションが成立していました。



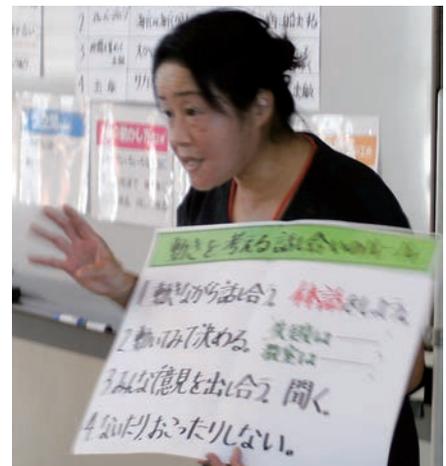
子どもたちが英語を使ってコミュニケーションを図る時間をしっかりと確保すること、自信をもって発信できるようにグループで工夫する機会をもつこと、英語や内容を改善できるように発表の機会も複数回設けること、即興で表現する必然性と相手意識のある発表を仕組むこと、様々な良さと生徒の笑顔の光った授業でした。



宇多津北小 作花志保先生の実践です。

子どもと共に汗を流すどころか子ども以上に汗を流す体当たりの授業でした。

グループの話し合いでは、車座に座って話し合うだけでなく、動きながら対話を進める「体話」を大切にしていました。実際に表現しながら「体話」することで、子どもたちの発想がみるみる広がります。子どもたちの動きのよさを見つめ、グループ内に広めたり、工夫の視点「空間」「動き」「リズム」「友達」とつないだりする助言も、いっしょに動きながらです。



ついででグループ同士を仕切り、視点に従い表現の工夫点を指摘し合う活動も実に楽しそうでした。

「言葉だけの教育は虚しい。行動の教育こそが重要！」教育の原点を思い出しました。



直島小 濱中紀子先生の2回目の実践です。

濱中先生は、ペア・グループ学習に様々な工夫が見られました。

例えば、二重円になって背中合わせの状態から振り返って会話を始めたり、ローテーションや選択により相手を替えたりすることによって、より新鮮な気持ちで対話に取り組めます。



また、インタビューをする側とされる側にグループを分け、ALTと分担して指導にあたることで、活動の幅が広がっていました。

さらに、ALTとのデモンストレーションで例を示したり、ファイルで既習事項を振り返る場を設定したりする等、変化のある繰り返して、表現の定着を図っていました。付箋紙による個別支援も非常に有効でした。

三豊中 寶積ゆかり先生の実践です。

グループ内での交流、グループ間の交流が活発に行えるように、さまざまな教師のしかけがありました。

子どもの人間関係を加味したグループ編成をしたり、「カードの並べ替え」、「書く」、「暗唱」、「リレー読み」、「役割演技」、「クイズ」等々、バリエーション豊かな活動をテンポ良く展開したりしていました。



自分の成長を自分で見て確認できる評価表や活動する時と聞く時のけじめをつける学習規律の徹底などのお土産をたくさんいただき、参観された先生方の満足そうな顔が印象的でした。

寶積先生は、表情がとても豊かなので、多く語らなくとも、「いい」「悪い」が子どもたちによく伝わっていました。「教師は五者たれ」の言葉を思い出しました。

丸亀東中 香川信子先生の実践です。

適切な生徒指導、丁寧な学級経営に裏打ちされた実践で、「群読を工夫する」という目的意識が明確に子どもの中にありました。

各グループへの指導として、発達に応じて柔軟に、話形を活用した話し方・聞き方を促しながら、意図的に机間指導をしていました。



また、自力解決（前時）→グループ学習（本時）→全体交流（本時・次時）→個人での振り返り（次時）という単元の流れを子ども自身が理解していたのが、素晴らしいと感じました。本時も、活動の流れが確認できるように板書されていたので、見通しをもって学習を進められていました。

田中小 児玉博美先生の実践です。

本時、児玉先生が机間指導された回数は、なんと、20回を超えていました。

同じ考えをもつ3～4人の小グループをまわり、短い時間でポイントを押さえた助言を送っていました。

特に、各自が描いた空気のイメージ図を説明し合う場面では、自信をもつよう励ましたり、周囲の者に見せながら自分の言葉で説明するよう働きかけていました。



よくありがちな、ワークシートに書いた文を読むだけの発表、一人がいきなり全体の場で話す負荷の大きい発表、完璧な答えを求められている発表などとは違い、子どもたちは、柔らかい表情で気楽に話し合い、自由に表現することができていました。

参観者からは、安価で分かりやすい実験教具の開発や子どもの意識に対応するため本時登場しなかった実験準備があったこと等、大変勉強になったとの声が聞かれました。

飯山北小 西吉淳子先生の実践です。

パンフレットづくりで困ったらすぐに友達に相談できるよう座席を工夫していました。また、机の真ん中に必要な材料・道具や前時までに猪熊弦一郎について調べてきたことの蓄積したポートフォリオなどがあり、いつでも手にとって活用できるようにしていました。

めあてを確認する場面では、板書上で、①猪熊弦一郎の気持ち、②自分が感じたこと、③色や形の特徴の内、付け加えたい内容を分類整理することで、自分のめあてを明確に意識させることができていました。



また、前時までに見つけた猪熊作品のよさを板書や掲示で示し、既習を振り返る有効な支援となっていました。

さらに、相互交流する場面では、友達のパンフレットのよさを付箋紙に書いて返していました。

「自分の思いはたっぷりあるね。猪熊さんの思いを書いてみる？」という声かけにより、「奥さんを思い出していたと思う。」という発言が飛び出す等、子どもたちは作者の思いにまで考えを深めることができていました。



四条小 丸野千恵子先生の実践です。

T「家族に喜ばれる献立作りのポイントは、栄養のバランスのよさ以外に、どのような視点があるでしょうか。」

と投げかけることで、子どもはいろどりや味のバランスに着目することができていました。1つ1つの発問や助言が明確なので、グループで何をするのか、活動がはっきりしました。個々に考えた献立を比較し、互いのよさを見つけたり、それをまとめたりするグループ活動では、献立をよりよく修正する視点を子ども自らが発見することができました。



さらに、栄養教諭とのT.Tも絶妙のコンビネーションで、実物を使った専門的なアドバイスをもらったら、必ずこれまでの学習とつなぎ、子どもの意識の流れに位置付ける助言を行っていました。

教材提示機を使って子どもの反応を教材化したり、きちんと指示棒を使って意味の共有化を図ったり、と確かな指導技術が目標を支えていることを実感しました。



三木中 山下光先生の実践です。

T「2つの角がそれぞれ等しい三角形は、いろいろ描けるね。こんな小さな三角形も描けるんだね。」

T「ということは、合同にならない場合がある、ということなんだね。」

合同な三角形を作図するための条件を考える学習活動の中で、合同にならない場合の条件について、理解を深めていました。グループ活動や板書に工夫が見られ、合同条件の意味理解を深めるだけでなく、興味・関心を高めることにもつながっていました。



自力解決の場を十分確保するとともに、個別指導によって、全ての生徒が課題を解決することができていました。その後、グループになり、それぞれが書いた図を付き合わせ、常に合同になると言えるか、とグループ内で検証しました。

一人一人の考えがグループの中で生かされる工夫が素晴らしかったです。また、子どもが板書に参加し、そこでも活躍の場が保証されていました。

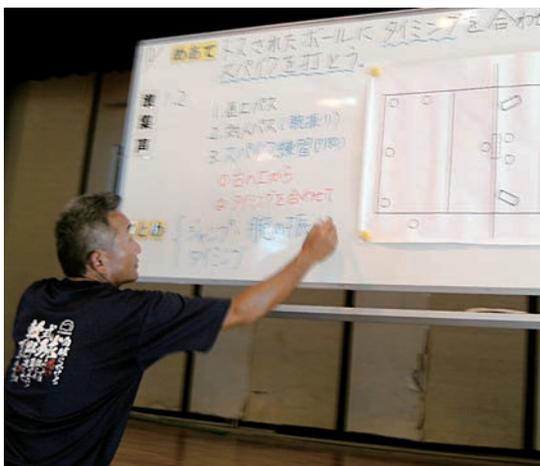
多度津中 片岡茂先生の実践です。

学習規律がしっかりと守られている気持ちの良い授業でした。日頃から、学習上のルールを大切にしていた授業実践を積み重ねているからこそ、子どもが活動のけじめをつけ、きびきびと動けるのだと感じました。

グループでの準備運動や練習も、リーダーを中心に声をかけ合い意欲的でした。ボールを使って練習している子どもだけでなく、ボールを持たない子どもにも、目配り、心配りし、熱心に個別指導をしている片岡先生の姿が印象的でした。



学習の中にユニバーサルデザインの考えを取り入れ、めあてと振り返りの場を保証したり、板書に、活動の手順が示されていたりする等、子どもに寄り添う手だても用意されていました。



Ⅲ おわりに

総合授業リーダーの先生方には、授業を公開するにあたって、次のようなお願いをしました。

(1) 「新たな試み」より「基礎・基本」を

指導案づくりの際、いわゆる「研究授業」をイメージして新しい教材開発を試みるよりも、「示範授業」をイメージして、普段、実践されているベーシックな授業を心がけてください。リーダーの先生方が当たり前としか感じられていない匠の技を、暗黙知として眠らせるのではなく、「公の言葉」に顕在化させ、香川の宝として伝承することが、本事業の本質です。

(2) 「さぬきの授業 基礎・基本」の活用を

そのために、昨年度末にお配りした「さぬきの授業 基礎・基本」の活用をお願いします。本時の授業が成立する要因のいくつかは、必ずこの中にあるはずです。それを計画書作成時に、予めピックアップしていただき、参観の視点としてください。本冊子の小見出し8項目から1項目以上を選び、例えば「参観の視点は『I-4 発言の取り上げ方』です」と、授業を観る視点を明示してください。

(3) 育った結果より育てている過程を

育った結果よりも、今まさに育てているところを公開していただく方が、参会者の学びは大きいはず。参会者は、「分かった」「できる」という声が飛び交う授業より（これも素晴らしいですが）「分からない」「できない」子どもに、いかに手だてをうっているのかを見たいと感じています。

(4) 「さぬきの授業 基礎・基本」の活用して授業説明を

事後討議では、授業者による授業説明の時間をたっぷりとってください。通常の研究授業の事後討議のように「成果と課題」が討議の柱になるのではなく、「本時の、あるいは普段の、どのような授業者の営みが、本時を成立させているのか」を明らかにすることが討議の目的です。「さぬきの授業 基礎・基本」の小見出しを参会者が授業を観る視点とし、本時を支える普段の教科経営、学級経営、教材研究等について、ノート等の具体物を示しながらのご説明をお願いします。

(5) 参会者の発言しやすい雰囲気づくりを

若い先生方の参会がぐんと増えることが想定されます。「どうすれば、このような子どもが育つのだろう」という問いが発せられるよう、ワークショップ型の討議を取り入れる等の工夫をお願いします。

総合授業リーダーの先生方は、見事にこの期待に応えていただきました。参観者の先生方に、さぬきのよい授業のイメージを伝えていただきました。明日からすぐまねたい技も、いつかはやってみたいあこがれの授業も、その両方を示していただいたことに、心から感謝しております。ありがとうございました。

また、運営面では、総合授業リーダーの所属校のみなさんに大変お世話になりました。ありがとうございました。

本冊子を介して、ベテランの先生が若い先生にその価値を語ったり、若い先生がベテランの先生にその意味を問いかけたりと、本冊子が指導技術の継承や日々の授業改善の一助となることを願っております。

